

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：34104

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520590

研究課題名(和文) ライフヒストリー的アプローチによる熟練教師の「熟練性」及びその形成過程の研究

研究課題名(英文) research on the "nature of skillfulness" and the formation of skillful teachers using the life history approach

研究代表者

康 鳳麗 (KANG, FENGLI)

鈴鹿医療科学大学・保健衛生学部・准教授

研究者番号：30399034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：三年間の事例研究は下記のように三つに大別される。

1. 個別事例研究 2. コーホートによる事例研究 3. 教科書試作と検証

個別事例研究としては、3人の日本語教師の授業スタイルの形成過程を明らかにした。またコーホート概念を用いて、天津と西安における4人の中国人日本語教師の熟練性の発達の共通性を明らかにした。一方、言語教師の授業力量は、使用する教材との協同において発揮される。中国語教育の教材＝教科書を試作し、実験、検証を行った。日本人学習者用であるが、反転させれば第二外国語としての日本語学習にも転用できる。教科書作成を通して熟練教師の「熟練性」を形式知に換えその「熟練性」を共有財産にしていく道を拓いた。

研究成果の概要(英文)：Three years case studies can be divided three sections as follows:

1. Individual case study 2. Case study by cohort 3. Textbook trial production and a verification

In the individual case study, the formation process of three Japanese teachers' lesson styles were clarified. In the 2nd section, the similarity of development four Chinese Japanese teachers' skill nature in Tianjin and Xian were clarified using the cohort concept. In the last, a language teacher's lesson ability is demonstrated in collaboration with the teaching materials to be used. Teaching materials of Chinese education = the textbook was made as an experiment and experiment and verification were performed. Although it is an object for Japanese students, if it is reversed, it can be applied also to the Japanese study as the second foreign language. The way which changes the skillful teacher's "skill nature" to formal knowledge through textbook creation, and makes the "skill nature" common property was cultivated.

研究分野：人文学

キーワード：ライフヒストリー的アプローチ 「熟練性」 授業スタイル 日本語教師

### 1. 研究開始当初の背景

筆者らはこれまで、日本語教師の授業スタイルの固有性や歴史性を踏まえたライフヒストリー的アプローチによる日本語教師の力量形成研究を行ってきた。

「日本語教師の力量形成へのライフヒストリー的アプローチ」(科研費 H18-19 年度基盤研究(C)(1) 研究代表者: 康鳳麗)では、教える条件や環境とは関係なくどの日本語教師においてもそれぞれ独自の「授業スタイル」が存在すること、個々の教師の授業スタイルは、各人の実践的経験やそのリフレクションに大きな影響を受けていることを明らかにした。

また、「ライフヒストリー的アプローチを活かした総合的な日本語教師の力量研究」(科研費 H21-23 年度 基盤研究(C)(1) 研究代表者: 康鳳麗)では、個別的事例研究と比較対象的事例研究を通して、実際の教師の成長の個性的な様態は、技術主義的な理解(技術の習得と応用)では限界があり、観の変革が授業スタイルの形成に影響を与えていることを明らかにした。熟練教師には、条件や環境を超えてある種の共通性(「二重の応答性」と呼べるもの)を見出すことができた。

本研究は、これまでの研究を踏まえて、ライフヒストリー的アプローチを用いて、日本語教師、とりわけ、熟練教師一人ひとりの授業スタイルの固有性や歴史性を踏まえた力量形成の過程に焦点化して、研究を深化させることを企図したものである。

教師の熟達研究については、近年、技術的熟達者モデルから反省的实践家モデルへの転換に伴ってあらためて重要な研究課題として浮かび上がってきている。熟練教師の「熟練性」とは何かということについて、教師論の分野では熟練教師と初任教師の実践的思考様式の比較研究(佐藤・秋田 1991)や比喩生成課題による教師の教える経験に伴う授業イメージの変容研究(秋田 1996)などの研究蓄積がある。佐藤・秋田(1991)では即興的思考、不確実な状況への主体的な関与、多元的思考、文脈に即した思考、発見的反省的な問題構成の方略などの熟練教師の思考様式の特徴が明らかにされている。また秋田(1996)では熟練教師の授業イメージの特徴(「伝達」ではなく「共同作成の場」)も明らかにされている。この動向の中で日本語教師の経験年数による授業イメージの違いが明らかにされている(藤田 2010)。すなわち教師歴が長く知識や技術、信念が確立した教師ほど、教師主導型から学習者の自律性を目指した授業へと移行し、授業観・学習者観の変革が起こることが明らかにされた。しかしながら、日本語教育の分野における熟練教師の「熟練性」についての研究の多くは、いまだ技術主義的な熟達研究にとどまっており、熟練教師の思考様式の特質や授業イメージを明らかにする研究は少なく、その

形成過程についての研究はほとんど見当たらない。

### 2. 研究の目的

本研究「ライフヒストリー的アプローチによる熟練教師の「熟練性」及びその形成過程の研究」は、熟練教師の「熟練性」とは一体はどのような力量内容のことを指すのか事例研究を通して明らかにすること、熟練日本語教師はその力量をどのような過程で獲得して行ったのかライフヒストリーインタビューを通して明らかにすること、日本語教師としての熟練度を向上させるためにライフヒストリーステージにおいてどのような経験が必要なのか、教員養成段階や OJT (キャリア形成) の過程で必要な研修内容は何か、を具体的に示すことを目的とした。

### 3. 研究の方法

上記の観点から、本研究では三年間のスパンの中で、研究協力者の日本語教師を対象に授業見学・ライフヒストリーインタビューを実施し、授業スタイルの抽出・分析を課題とした。

教師の「授業スタイル」の理解のため、ライフヒストリー的アプローチを用いた。まずこの方法論を用いた参加観察やインタビュー研究等の質的研究の意義を、先行研究のオーバerviewを行う中で明らかにした。また、この研究方法の問題点の解明・克服について考究を重ね、標準化を図った。

具体的な事例研究で、基本的には教師に対するインタビュー、参加観察を行った。研究期間中フィールドとして、日本国内においては ARMS 日本語学科、国際教養大学、リバティインターナショナルスクール、海外においては西安外国語大学、長安大学、天津外国語大学、天津師範大学、国立台北大学、真理大学、銘傳大学に赴いた。そこで様々な目的を持つ学習者(例えば、日本での進学を目指す日本語学校の就学生、日本の大学で日本語を学ぶ留学生、海外の大学で日本語を学ぶ日本語専攻の大学生)を対象に教える 30 代～50 代の、経歴の異なる日本語教師の授業を見学し、ライフヒストリーインタビューを実施した。教師たち自らの授業実践経験が自分の授業スタイル形成にどのような影響を与えたか、授業参観、インタビュー、授業記録等を用いて明らかにした。

### 4. 研究成果

三年間に渡る事例研究は、下記のように三つ大別できる。

#### (1) 個別事例研究

個別事例研究としては、3人の日本語教師の授業スタイルの形成過程を明らかにした。

これまでの、それぞれ日本国内の大学、日本語学校で日本語を教える2人のネイティブ熟練教師の事例研究に加えて、中国の大学

で日本語を教えるノンネイティブ熟練教師1人の事例分析を取り上げた。その結果、3人の熟練日本語教師は所与の環境、条件の中で独自に授業スタイルをつくりあげてきているが、その一方、共通して高度な「二重の応答性」を発揮していることが明らかになった。そして、その高度な「二重の応答性」の形成過程として「観」の変革をとまなう「できごと」との出会いがあることが確認された。

図1 授業スタイルと観の形成

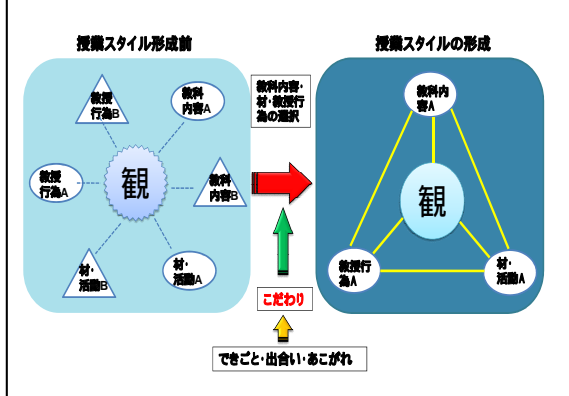
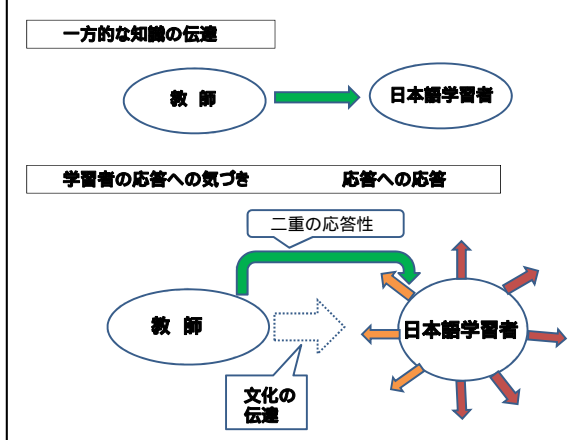


図2 日本語教師における「二重の応答性」の獲得



その内容は以下の通りである。  
 熟練教師は、教室全体にアンテナを張りながら、瞬時に学習者の応答をキャッチし、reflection-in-action(Donald Schön 1983)を行いながら、授業を自己評価したり、学習者の応答を巧みに授業の流れの中に取りこんだり、展開の起点となりにしている。  
 個々への応答と全体的な応答は同時に、かつ、双方向的に行われ(空間の再構築)また時間の再配分もたえず行われている(時間の再構築)  
 高度な「二重の応答性」の獲得の契機として、それぞれの教師としてのライフストーリーにおいて、「挫折体験」や「日々の反省的思考」それらによってもたらされる授業に対する基本的な考え方の変化(「観」の変革)を指摘することができる。  
 (業績〔雑誌論文〕(9)、〔学会発表〕(4))

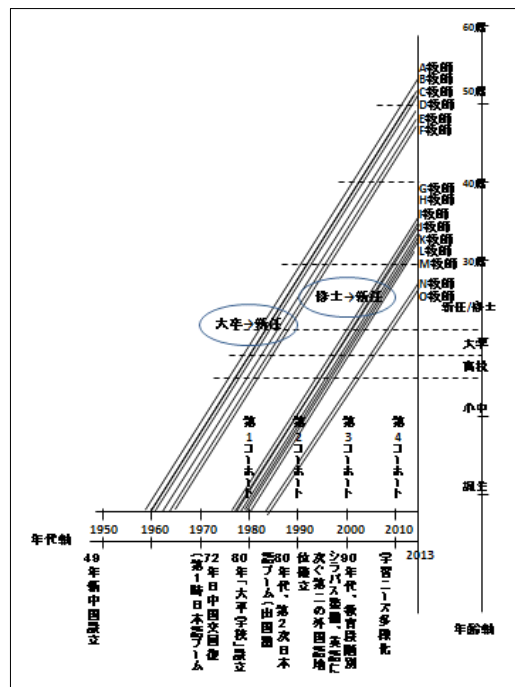
(2) コーホートによる事例研究

コーホート概念を用いて、天津と西安における4人の中国人日本語教師の熟練性の発達共通性を明らかにした。

中国の高等教育機関における日本語教育の制度的歴史、また、日本語教育をめぐる社会的文化的背景を基に、1980年代から現在に至る第一コーホートから第四コーホートを析出した。そして、天津と西安の15人の大学に勤める日本語教師のライフヒストリーをそこに位置づけるという作業を行った。その結果、天津と西安の地域性よりも世代コーホート性の方が強く個々のライフヒストリーに影響していることが判明した。各々の世代において「教える」ことについて、共通の時代的な課題(例えば日本語をめぐる情報環境の変化や学習者である学生の変化)が存在し、また「悩み」も共通する。中国における日本語教育の大きな課題として、まず、若い日本語教師が「教える」という仕事と自らのキャリアアップを同時に行っていかなければならないこと、次に、熟練教師が培ってきた日本語教育についての「教える」専門性をどう継承すればよいのか、といった点が挙げられる。

(業績〔雑誌論文〕(3)、〔学会発表〕(2))

図3 研究対象者コーホート



(3) 教科書試作と検証

言語教師の授業力量は、使用する教材との協同において発揮される。中国語教育の教材=教科書を試作し、実験、検証を行った。日本人学習者用であるが、反転させれば第二外国語としての日本語学習にも転用できる。教科書作成を通して熟練教師の「熟練性」を形

式知に換えその「熟練性」を共有財産にしていく道を拓いた。(業績〔図書〕(1))

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 13 件)

- (1) 森脇健夫「活用型授業(学習)の意義と課題」『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第 35 号, 2015 年, pp.7-12
- (2) 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫「中国の日本語学習者の物語描写における視座形成の実態」『常葉大学経営学部紀要』第 1 巻第 1 号, 2014 年, pp77-86
- (3) 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「中国における中国人日本語教師のライフヒストリー研究 コーホートによる授業スタイル形成の相違に着目して」『鈴鹿医療科学大学紀要』No. 20, 2013 年, pp. 39-48
- (4) 森脇健夫・山田康彦・根津知佳子・中西康雅・赤木和重・守山紗弥加・前原裕樹「対話型事例シナリオによる教員養成型 PBL 教育」『京都大学高等教育研究』19 号, 2013 年, pp.13-24
- (5) 森脇健夫「学校改革・教師の授業改革・学習習慣の形成、三位一体の改革の必要性」  
<http://www.mie-c.ed.jp/shochu/plan2/4miedaigakuteigen.pdf> (2014.4.25 確認) pp.1-12
- (6) 森脇健夫「学校が変われば学力も動く」三重大学教育委員会『授業改善支援プラン』, 2013 年, pp.37-48
- (7) 森脇健夫「『存在論的つながり』と『認識論的つながり』」『学習研究』第 456 号, 2012 年, pp.24-29
- (8) 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫「日本人児童の文章における視座形成の実態」『浜松大学研究紀要』25(1), 2012 年, pp.81-89
- (9) 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信「熟練日本語教師の力量内容とその形成 ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究」『三重大学教育学部研究紀要 第 63 巻』, 2012 年, pp.267-273
- (10) 森脇健夫・山田康彦・根津知佳子・中西康雅・赤木和重・守山紗弥加「教員養成型 PBL 教育の研究(その 1)」『三重大学教育学部研究紀要, 第 64 巻(教育科学)』, 2012 年, pp.325-335
- (11) 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信・和田明子「日本語教師の力量形成研究 線画の発達と『観』の形成」三重大学国際交流センター紀要第 6 号 2011 年 pp.53-63
- (12) 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「熟練日本語教師の力量内容とその形成 - ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究

-」『異文化コミュニケーションのための日本語教育』(2011 世界日本語教育研究大会論文集), 中国高等教育出版社, 2011 年, pp.767-768

- (13) 森脇健夫(共著)「授業研究方法論の系譜と今後の展望」『授業づくりと学びの構造』, 学文社, 2011 年, pp.37-87

〔学会発表〕(計 6 件)

- (1) 森脇健夫「教員養成型 PBL 教育における事例シナリオ教育の原理と方法」, 第 21 回大学教育研究フォーラム, 2015 年 3 月 14 日, 京都大学
- (2) 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「中国における中国人日本語教師のライフヒストリー コーホートによる実践的力量形成の相違に着目して」, 第 43 回中部教育学会, 2013 年 6 月 29 日, 富山大学
- (3) 森脇健夫「中堅教師の飛躍台としての校内研究(学校)」, 日本教育方法学会第 48 回大会ラウンドテーブル報告, 2012 年 10 月, 福井大学
- (4) 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「ライフヒストリーアプローチによる日本語教師の力量形成研究の意義と課題 個別事例研究から熟練教師の熟練性の研究へ」, 日本語教育学会研究集会第 1 回口頭発表, 2012 年 6 月, 金城学院大学
- (5) 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫「中国人日本語学習者の物語描写における視座形成の実態 中国で学ぶ学習者を対象とした縦断的・横断的調査を通して」, 日本語教育学会研究集会第 1 回口頭発表, 2012 年 6 月, 金城学院大学
- (6) 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信「熟練日本語教師の力量形成と〔二重の応答性〕に関する研究」, 中部教育学会第 60 回大会, 2011 年 6 月, 静岡大学

〔図書〕(計 13 件)

- (1) 康鳳麗・坂本勝信・森脇健夫『フレーズで学ぶ はじめての中国語』, 三恵社, 2015 年 3 月, 総ページ数 112p
- (2) 森脇健夫『教育方法学研究ハンドブック』, 学文社, 総ページ数 444p (森脇 142-145)
- (3) 坂本勝信『日本語能力テスト提升訓練 語法 N1』, 上海译文出版社, 平成 26 年 6 月, 全 159 ページ
- (4) 坂本勝信『日本語能力テスト提升訓練 語法 N2』, 上海译文出版社, 平成 26 年 6 月, 全 167 ページ
- (5) 坂本勝信・吉原こずえ『日本語能力テスト提升訓練 听力 N1』, 上海译文出版社, 平成 26 年 6 月, 全 154 ページ
- (6) 坂本勝信・吉原こずえ『日本語能力テスト提升訓練 听力 N2』, 上海译文出版社, 平成 26 年 6 月, 全 137 ページ
- (7) 坂本勝信「区分 4 言語と教育」『平成 27 年度 日本語教育能力検定試験 合

格するための本』, アルク, 平成 27 年 1 月, pp. 90-111 (全 193 ページ: 分担執筆, その他の著者: 秋元美晴、竹内直也、志賀里美、古田島聡美、田辺和子、高橋恵利子、清水由美、猪塚元、星野恵子、辻和子、世良時子)

- (8) 森脇健夫「『学びの協同化』の観点から見る戦後社会科実践史 鈴木正気、安井俊夫、加藤公明実践の関係論的分析」臼井嘉一編『戦後日本の教育実践 戦後教育史像の再構築をめざして』, 三恵社, 2013 年 9 月, 総ページ数 317p (森脇 pp. 226-246)
- (9) 森脇健夫「第七章 中堅期からの飛躍『共同的な学び』との出会い」グループ・ディダクティカ編(共著者: 山崎雄介・松下佳代・松下良平・杉原真晃・木原誠一郎・久保研二・松崎正治・森脇健夫・藤原顕・萩原伸・村井淳志・吉永紀子・銚山泰弘・石垣雅也)『教師になること、教師であり続けること』, 勁草書房, 2012 年 9 月, 総ページ 262p (森脇 pp. 137-158)
- (10) 坂本勝信・吉原こずえ「日本語能力試験レベルアップトレーニング聴解 N 1」, アルク, 2012 年 7 月
- (11) 坂本勝信・吉原こずえ「日本語能力試験レベルアップトレーニング聴解 N 2」, アルク, 2012 年 7 月
- (12) 坂本勝信「日本語能力試験レベルアップトレーニング文法 N 1」, アルク, 2012 年 6 月
- (13) 坂本勝信「日本語能力試験レベルアップトレーニング文法 N 2」, アルク, 2012 年 6 月

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

康 鳳麗 (KANG, FENGLI)  
鈴鹿医療科学大学・保健衛生学部・准教授  
研究者番号: 30399034

### (2) 研究分担者

森脇 健夫 (MORIWAKI, TAKEO)  
三重大学・教育学部・教授  
研究者番号: 20174469

坂本 勝信 (SAKAMOTO, MASANOBU)  
浜松大学・経営情報学部・准教授  
研究者番号: 40387501

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: